



自衛隊埼玉地方協力本部

JAPAN SELF DEFENSE FORCES SAITAMA PROVINCIAL COOPERATION OFFICE

サバイバルゲームイベントに参加



広報ブース前にて サイボンと



広報ブースの様子



サバイバルゲームの様子

埼玉地方協力本部（本部長 山下一空佐）は十月十日（日）滑川町にある総面積七〇〇坪を有するアウトドアフィールド「サバっちゃ」で開催された「自衛隊フェス」イベントにおいて、自衛隊装備品展示及び自衛官募集広報ブースを設置し、募集広報活動を実施した。

秋晴れのサバイバルゲーム日和となったこの日、埼玉県内はもとより群馬県や千葉県など他県からの参加者もあり、約一四〇名がこのフィールドに集まった。遠目では自衛官と区別がつかない程の本格的な戦闘服や装具を身につけた参加者もあり、サバイバルゲームを楽しむ人達の熱気が感じられた。

装備品展示は、中央即応連隊（宇都宮駐屯地）から輸送防護車と軽装甲機動車が参加した。一般道からアウトドアフィールドまで続く狭く険しい道を抜けて参加者の前に姿を現わすと、会場からは歓声が上がった。ブッシュマスターとも称されている輸送防護車は実物を見る機会が少ない装備品のため、一緒に記念撮影をしたり、中央即応連隊員に話かける参加者が多くいた。

募集広報ブースでは、入間地域事務所（所長 村上二空尉）の広報官と埼玉地本マスケットキャラクター「サイボン（りく）」が対応した。陸上自衛隊の防弾チョッキと鉄帽を展示するとともに、試着会では実際の装具を手に取り、広報官に質問したり、試着して写真撮影する参加者など人気のブースとなった。南極の氷の展示では、砕氷艦「しらせ」で航海経験のある広報官が説明を行い、氷を触れる人や耳を傾けて空気の弾ける音を聞く人の姿もあった。また、多くの方にアンケートの回答をいただき、自衛隊グッズをプレゼントした。各所で参加者や家族の方に自衛隊の説明やパンフレット配布を実施するなど、積極的な募集広報活動を行った。

イベントの最後には来月十一月十一日で十歳になる「サイボン（りく）」の一月月早い誕生日祝いをを行い、参加者とも記念撮影を行うなど一体感のある一日となった。

埼玉地本では、今後も自衛隊をより身近に感じてもらえるよう地域のイベントに積極的に参加し、地元と密接した募集広報を行い、募集基盤の強化を図っていく。



サイボン 誕生日 集合写真

予備自衛官一日間招集訓練を実施



自衛隊埼玉地方協力本部（本部長 山下真司一等空佐）は、令和三年十月十六日（土）、今年度最初の予備自衛官一日間招集訓練を実施した。

当初計画では、各四半期の最初の月に実施する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、第一四半期及び第二四半期の訓練は中止せざるを得なかった。そのため、今回は本年四月から九月までの間に自衛官退職後一年未満で採用された、幹部二名、准曹士二十一名の合計二十三名の予備自衛官が参加した。

また、会場についても、いわゆる三密を回避するため狭隘な埼玉地本会議室ではなく、近傍の施設を借用し実施した。

当日は、訓練に参加した予備自衛官を代表して、田村佳津人予備三等陸佐が招集訓練開始に伴う申告をした後、山下本部長が予備自衛官の国防における重要性をはじめ災害派遣活動における期待度等について、これまでの経験を踏まえ訓示した。その後、援護課長による精神教育や担当者による予備自衛官等制度説明を行い、次年度以降の五日間招集訓練への出頭意欲向上を図った。

その他、即応予備自衛官応募資格を有する予備自衛官に対しては、担当者が個別に面談を行い、即応予備自衛官に任用された場合の活動内容や処遇に関して丁寧に説明しながら、即応予備自衛官への志願を勧誘した。その際、「仕事と訓練の両立には不安はあるが、勤務先は即応予備自衛官に理解があるため、是非チャレンジしてみたい」と感想を述べた。

埼玉地本では、今後とも予備自衛官に寄り添った親身な対応と身上把握により、充足率及び訓練出席率の向上を図るとともに災害派遣等の招集機会には迅速に対応できるよう様々な施策を講じていくとのことであった。

